

Title	On the stability of minimal surfaces in R^3
Author(s)	Koiso, Miyuki
Citation	大阪大学, 1984, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/2983
rights	Copyright: Mathematical Society of Japan (社団法人日本数学会)
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名・（本籍）	こ	い	み	ゆき
	小	磯	深	幸
学位の種類	理	学	博	士
学位記番号	第	6	6	4
	号			
学位授与の日付	昭和59年12月10日			
学位授与の要件	理学研究科 数学専攻 学位規則第5条第1項該当			
学位論文題目	R ³ 内の極小曲面の安定性について (主査)			
論文審査委員	教授 柴田 敬一 (副査)			
	教授	田辺	広城	教授
				村上
				信吾
				講師
				小松
				玄

論文内容の要旨

D は、平面内の有界領域であって、その境界 ∂D は、有限個の区分的に滑らかな閉曲線より成るものとする。 $\varepsilon: \bar{D} \rightarrow \mathbb{R}^3$ は特異点のない極小曲面であって、 ∂D を越えて、極小曲面として拡張可能であるとする。このとき ε は、その境界値を固定するすべての変分に対して、面積汎函数の臨界点である。 ε が、このようなすべての変分に対して面積極小であるとき、「 ε は安定である」と定義し、安定でないとき、「不安定である」と定義する。

ε のGauss写像を \mathcal{G} で示す。このとき、 ε の安定性に関して次の結果が知られている。

定理 (Barbosa-do Carmo)。 $\mathcal{G}(\bar{D})$ の面積が 2π よりも小さいならば、 ε は安定である。

この評価は次の意味でsharpである：不安定な極小曲面であって、そのGauss写像の像の面積が 2π よりも大きく、かつ、 2π にいくらかでも近いようなものが存在する。

それでは、 $\mathcal{G}(\bar{D})$ の面積が丁度 2π に等しい場合には、 ε の安定性は如何様であろうか。本論文では、この問題の解答を与えている。

定理1. $\mathcal{G}(\bar{D}) = 2\pi$ であり、 $\mathcal{G}(\bar{D})$ がいかなる閉半球面とも一致しないならば、 ε は安定。

定理2. $\mathcal{G}(\bar{D})$ が閉半球面 H と一致するとする。もしも $\mathcal{G}(\partial D) \neq \partial H$ ならば、 ε は安定。

最後に、 $\mathcal{G}(\bar{D})$ が閉半球面 H と一致し、しかも、 $\mathcal{G}(\partial D) = \partial H$ なる場合には、 \mathbb{R}^3 の適当な回転を施すことにより、 H は下半球面 H^- と一致するとしてよい。このとき、 ε のWeierstrass表示の要素函数を f, g として、 $F(w) = \sum_{\zeta \in g^{-1}(w)} g(\zeta) / f(\zeta)$ と定義すれば、 F は単位円板 D_0 で正則であり、次の結果が成立する。

定理3. $\operatorname{Re} F''(0) \neq 0$ ならば、 ε は不安定。

したがって、定理3の仮定を満足するような極小曲面は、物理的には存在しない。また、 F は、 ε のパラメーターの変換に依らずに決まる函数である。

定理1～3の証明には、固有値問題「 \bar{D} 上、 $\Delta v - \lambda KWv = 0$ かつ、 ∂D 上、 $v = 0$ 」(ε のGauss曲率および面積要素を、それぞれ、 $K, Wd\varepsilon d\eta$ とおいた。)の最小固有値 λ_1 と面積汎函数の第2変分 $I^{(2)}(v)$ の符号、および ε の安定性に関する次の補題が本質的である。

補題 (1) $\lambda_1 > 2$ ならば、常に $I^{(2)}(v) > 0$ であり、よって ε は安定。(2) $\lambda_1 = 2$ ならば、常に $I^{(2)}(v) \geq 0$ であり、 $I^{(2)}(v) = 0$ となるのは、 v が最小固有空間 E_1 に属するとき、かつ、そのときに限る。(3) $\lambda_1 < 2$ ならば、 $I^{(2)}(v) < 0$ となる変分 v が存在し、よって ε は不安定。

定理1および2は、 $\lambda_1 > 2$ を示すことにより証明される。定理3は上の補題の(2)の場合にあたるので、 E_1 に属する v について、面積の第3変分 $I^{(3)}(v)$ を計算することによって、これを証明する。

論文の審査結果の要旨

R^3 内の極小曲面の安定性をガウス写像によって判定しようとする発想はH. A. Schwarzにまで遡ることができる。即ち、彼の一連の研究から導かれる系として次の結果が広く知られている。

定理1 (Schwarz). R^3 内の極小曲面のガウス写像が1:1で、且つ像集合が半球面 H を含むならば、その極小曲面は不安定である。

1976年に至り、定理1に於ける、集合の包含関係をより弱い面積の大小関係で置き換えた、次の判定条件が発表された。

定理2 (Barbosa and do Carmo). R^3 内の極小曲面のガウス像の面積が 2π よりも小さければそれは安定である。

任意の正数 ε を与えるとき、ガウス像の面積が 2π と $2\pi + \varepsilon$ との間にあるような不安定極小曲面が存在することがわかるから、その意味で定理2は精確であるが、丁度 2π に等しい場合については不問に付されており、未解決の問題として残されていた。小磯君はこの問題を研究して次の結果を得た。 D をパラメーター領域とすると、

定理3 (小磯). R^3 内の極小曲面 $x = x(w)$ ($w \in \bar{D}$) のガウス像 $G(x)$ の面積が 2π に等しいとする。もし、 $G(x(\bar{D}))$ が半球面 H に一致しないか、または一致しても G が \bar{D} から H の上への分岐被覆でなければ、 $x(w)$ は安定である。

この定理は面積汎函数の第2変分、それに付随するラプラシアン固有値問題の解、及び等周不等式を用いて証明される。

次に、極小曲面 $x(w)$ をWeierstrass表示する際の正則及び有理型函数 f, g を用いて正則函数 $F(w) = \sum_{\zeta \in g(w)} g'(\zeta)/f(\zeta)$ が導入され、定理3の仮定をみたさない場合について、使い易い十分条件が得られる：

定理4 (小磯). $G(x(w))$ が \bar{D} から下半球面の上への被覆面を定義している場合に、もし、 $\text{Re}\{F''$

(0) $\neq 0$ ならば, $x(w)$ は不安定である。

この方法によれば, 不安定な極小曲面を具体的に多数, 構成できるのみならず, 1つの不安定極小曲面の適当な制限が安定になる限界を知ることも可能になった。

以上のように本論文は極小曲面の安定性の判定について本質的な進歩をもたらしたものであり, 理学博士の学位論文として十分に価値のあるものと認められる。